

## 登山者はどこまでアスリートか？

OWCC 中川和道 20190219

競技系の体育学の研究者と話す機会があって、ずいぶん面白かった。その話をしよう。『岳人』2019年3月号の服部文祥氏の記事47とよく似た話題になって、すみませんが・・・。

やり投げのトップアスリートにやりを手にとってもらい、重さや重心の位置、しなり具合をたずねてみたらね、とその研究者は切り出した。トップレベルの選手は、何と、1-2%くらいの精度でその重さを絶対値であるのだという。重心の位置やしなり具合の把握も素晴らしく正確で、その重さでその重心のやりをどのように投げたらどう飛んだかを、何度も詳しく把握する。現代スポーツ科学の常道にそって真横からビデオ撮影し、飛行の軌跡をコンピューター解析して競技成績の向上に挑むのが最近のアスリートだが、実は、昔から、彼らはコンピューター以前でも定量的に進んできた。彼らは、やりをしならせながら蛇のようにうねらせて飛ばせる。空気をけりながら飛ぶことよって、同じ重さの鉄球（空気まさつゼロの運動力学の代表として用いられる）よりも、長い距離を飛ばせるのだ。

野球の研究者に聞いても同じようなことを言う。その先生によれば「僕はせいぜい5%だが、IR選手はバットの重さを1-2%である」のそうだ。何グラムで重心や握りがある特定のバットをどう振ったらどういう打撃ができるか、とことん追求する。結局、その先生は5%で詰めきれない範囲以下の正確な打撃はできないが、IR選手はそれができるのだそうだ。まるで寿司職人が握った米粒の数をあてて味を制御するという話みたいだね、と言ったら、そのとおりで言われた。店が閉店した後、一生懸命、数える修行から出発するのだという。数や質の把握ができるようになったら、次は理想を目指す「制御」だ、中川さん、職人ってすごいよね、という。聞けば、IR選手が使ったバットだというと、運動具店では爆発的に売れるという。だが、それを成果があがるやり方で振るための特別なトレーニングを設計でき、かつ、達成できるIR選手によってはじめてそのバットはIR選手のバットになる。まさしく野球職人である。同じバットで同じ打撃をする道のりは、えらく厳しく、遠い。

さて、そんな話が一段落しつつあるタイミングとなった。中川はまずい、と思った。案の定、話が登山の方に向いてきた。「中川さんは、冬の登攀の山靴とアイゼンで、あれは何グラム？」「うーん、靴が片足1150グラム、アイゼンは400グラムかなあ？」「ピッケルやアイスバイルは？」「中川さんは、重さが何%重くなったら、分かる？」「えーと、あ、あー、靴は20%かなあ、アイゼンが雪でダンゴになってさ・・・」相手は「\*\*\*\*」。彼が思うところは「こいつはスポーツ職人じゃない、登山は、アスリートとは、えらい違う世界みたいだ・・・」であったに違いない。中川は、登山と競技スポーツの差を思い知った。

おーい、誰か、中川と交替してくれ、アスリート系クライマー、助けてくれないか？